

Danguolė Mikulėnienė & Anna Stafecka (編)

Baltu valodu atlants: Leksika 1 Flora /

Baltų kalbų atlasas: Leksika 1 Flora /

Atlas of the Baltic Languages: Lexis 1 Flora

Otrais izlabots un papildinats izdevums / Antrasis pataisytas ir papildytas leidimas

/ Second revised edition. Vilnius: Lietuvių Kalbos Institutas, 2013, 568pp.

鈴木 博之

1 本書の概観と総評

本書は、ラトビア語・リトアニア語・英語の対訳とし、バルト諸語の植物相の語彙26項目の言語地図とその分析・解釈を行っている。初版(2012)は印刷物(図1参照)も作成されたが非売品であり、CD-ROM版(pdf)のみの販売¹となっている。



図1：書評対象の書籍版初版（Lietuvių Kalbos Institutasにて；2018年評者撮影）

¹Lietuvių Kalbos Institutasにて購入可能である。

初版では16項目を取り上げ、総ページ数540ページのものであった。構成も、ラトビア語・リトアニア語・英語の3言語で独立しており、それぞれ同様の内容の繰り返しであった。ところが、「(初版の) CDの地図が利用に不便であったため」(第二版2013: 8, 9, 376)、改訂を行ったとの記述がある。いずれの版もpdfで読むことができる。

書名が示すように、本書は『バルト諸語言語地図』の第1巻である。現在のところ、続く巻はまだ出版されていない。また、書名はラトビア語・リトアニア語・英語が併記されている。冗長ではあるが、引用時にはすべての言語による書名を記すことが公平であるだろう。本書の編者による『バルト諸語言語地図』編纂の過程に関する記事が学術誌で公開されているため、編纂の詳細についてはStafecka (2010, 2016)を参照されたい。

初版は言語別に記述がなされており、ラトビア語(pp. 1-178)、リトアニア語(pp. 179-355)、英語(pp. 356-540)の順で、それぞれの記述内容および配列は一致している。記述の部分は2段組である。構成について見ると、大きくは目次、まえがき、序論、地図、補遺となっている。ところが第2版は、記述の順について大幅な変更が認められる。まず、ラトビア語とリトアニア語による対訳の序論と解説(pp. 12-297; うち偶数ページがラトビア語、奇数ページがリトアニア語)があり、続いて地図(pp. 300-371)、英語版の序論と解説(pp. 379-531)、最後に補遺となっている。初版では補遺(地名リストと参考文献)が各言語ごとに繰り返されていたが、第2版では繰り返しがなくなっている。それに加えて、10個の語彙項目の解説と地図が追加され、合計では28ページ増となっている。

序論には2編の記事が収録されている。「ラトビア語とリトアニア語の語彙の地理言語学的研究」と「バルト諸語の植物相に関する一般的語彙」である。前者はバルト諸語の方言研究史がコンパクトにまとめられており、先行研究を手際よく紹介している点で非常に有用である。後者は本書の構成を述べつつ、植物相に関する語彙形式のありようを具体例とともに紹介しているが、その冒頭部分で本書が記述対象とする語彙形式がどのように選択されたかを記述している。これによると、本書の記述対象として、以下のように整理できる全ての分類を代表する語彙を選択しているとのことである。

1. 本来語

- (a) 語彙層が古期印欧語に属するもの
- (b) 語彙層がバルト・スラヴ語に属するもの
- (c) 語彙層がバルト諸語に特徴的なもの

(d) 語彙層がバルト諸語のいずれか1つの言語に特徴的なもの

2. 借用語

(a) バルト・フィン諸語（ウラル系）に起源をもつもの

(b) スラブ諸語に起源をもつもの

(c) ゲルマン諸語に起源をもつもの

(d) 他のバルト語に起源をもつもの

(e) その他の言語に起源をもつもの

これに続いて、ラトビア語方言の音声転写、リトアニア語方言の音声転写が示されている。これらの音声表記は国際音声字母（IPA）に基づいておらず、それぞれの言語で通用している音表記が用いられている。すなわち、ラトビア語とリトアニア語の表記方法に違いがあるということである。それぞれ100年以上の研究の蓄積があり、またラトビア、リトアニア双方における国家プロジェクトとして方言調査と言語地図作成が行われていることを考えれば、この音表記の方法は否めない。

言語地図とその解釈には、初版16項目、第2版26項目があり、それぞれ表1の順に配列されている。第2版では、単に10語が追加されただけでなく配列にも変更があり、意味範疇ごとにまとまりが出ている。それぞれの項目が特定の語を見出しとするのではなく、「～の名称」という呼称と該当する植物の写真が添えられているのは注目できる。また、地図作成と解釈は異なる作者による完全な分業作業となっている。言語地図はフルカラーであり、バルト諸語全体のもの、ラトビア国内、リトアニア国内のもの3種類がある。地図によっては多くの地点のデータが欠如しているものもある。初版は形式の分布を記述する方法において統一されておらず、仕様が異なっていた。第2版は、初版の地図が利用に不便であったため改訂したとあるが、地図の設計自体に変更は認められず、項目ごとに地図の様式が異なったままであるため、改訂の意図は地図作成の方針が徹底していないという点にはない、ということであろう。

いずれのデータも、本書のために調査されたのではなく、すでに出版されている国別の方言調査報告（LVDA 1999, LKA 1977-1991）から引用していることを考えると、先行研究にそもそもデータの欠落があると考えられる。地点はラトビアのLVDA (1999) から512点、リトアニアのLKA (1977-1991) から717点、合計1229点あり、それぞれ独立して1から通し番号が与えられている。地図上ではそれぞれ番号で示されている。具体的な地点名は補遺に地名リストがある。

pdf版のすぐれた点は、版面を自由に拡大縮小できるという点にある。印刷版を手にとってみたとき、B4サイズほどの大判であるにもかかわらず、フォントが小さく感じられ、読みづらいものであった。地図に配された地点番号も判別しがたい部分があった。ところが、pdfで閲覧すると、これらの問題は起こらず、必要に応じて拡大すれば、判読の困難は解決できる。特に精密な言語地図を出版する際には、電子データも配布する形がデータの見やすさと解釈の理解を促進する一助になるといえるだろう。

表 1: 『バルト諸語言語地図』第1巻の収録語彙と順序

初版	第2版（新規追加項目は*で示す）
イラクサ（刺草）の名称	ネズ（杜松）の名称
タンポポ（蒲公英）の名称	タンポポ（蒲公英）の名称
ヤグルマギク（矢車菊）の名称	イラクサ（刺草）の名称
ノコギリソウ（鋸草）の名称	ヤグルマギク（矢車菊）の名称
オオバコ（大葉子）の名称	ノコギリソウ（鋸草）の名称
ネズ（杜松）の名称	オオバコ（大葉子）の名称
松ぼっくりの名称	クローバーの名称*
クロイチゴ（黒苺）の名称	ヒマワリ（向日葵）の名称*
タマネギ（玉葱）の名称	冬小麦の名称
ジャガイモ（馬鈴薯）の名称	穀物の名称
カブハボタン（蕪葉牡丹）の名称	ソバ（蕎麦）の名称*
穀物の名称	タマネギ（玉葱）の名称
冬小麦の名称	ニンニクの名称*
ハシバミ（榛）の木の名称	キュウリの名称*
ナシ（梨）の名称	ジャガイモ（馬鈴薯）の名称
（樹木の）上部の名称	カブハボタン（蕪葉牡丹）の名称
	野イチゴの名称*
	ビルベリーの名称*
	クロイチゴ（黒苺）の名称
	ラズベリーの名称*
	ナシ（梨）の名称
	スモモ（李）の名称*
	ハシバミ（榛）の木の名称
	松ぼっくりの名称
	葉の名称*
	（樹木の）上部の名称

2 言語地図と解説について

本書にはすでに Jankowiak (2015) などの書評があり、ラトビア語、リトアニア語の方言研究史を手際よく紹介している。一方、本書評では、地理言語学的視点から見て、主に言語地図の作成方法と解説に焦点を当て、その特色と評価を行いたい。印欧語におけるバルト諸語の形式に関する問題点は、本書の多くの記述がその点を意識しているけれども、本書評の関心の外にある。

地理言語学の基礎を築いたヨーロッパには、ALE (1975-2007) をはじめとする大規模な地理言語学プロジェクトのほか、各国別に作成された言語地図の蓄積もあり、加えて理論的側面についても、Auer & Schmidt (eds) (2009) や Lameli et al. (eds) (2010) のような、伝統的な地理言語学とは異なる角度からのアプローチもあるなど、関連する研究は枚挙にいとまがない。それに対して、日本での地理言語学はグロータース神父の貢献によるところが大きく²、柴田(1969)が基本的な方法論を確立し、形式の分布が生じた背景をいかに解釈するかに重きを置く研究方法が主流である。このため、言語地図を作成、解釈するにあたっては、さまざまな見方があり、評者は日本での地理言語学からみたアプローチで本書を見ていきたい。

さて、本書は複数の著者からなる編著の形式を採用している。収録されている16項目についても、執筆担当が異なっている。そのため、記述の構成や地図の作成にばらつきが認められ、項目ごとに解説に割かれるページ数も2～9ページと大きく異なっている(表2、3参照)。語彙の地図化に当たり、それに付す説明の長短はテーマと語形式の寡多によるので、このようなばらつきが出てくるのは否めない。

各項目の記述ページ数(初版の表紙部分は除く)と含んでいる地図およびその描画方法については、次のようである。

地図は大小にかかわらず、原則1ページに1枚与えられている。表2、3で区画表示としているものは、語形式を整理・分類のうえ、区画を決定後に描画したものである。このタイプの地図でも、少数派の形式を示す際にはんこを用いている。はんこ表示の地図では、語形式を整理・分類して、それぞれの分類にはんこを割り当てて示したものである。地理言語学で分析対象とするための言語地図に近いタイプである。

言語地図の作成方法については、次のような点が指摘できる。

本書が提供する言語地図は、データ整理後の解釈が反映されていると判断できる。データは等語線によって分割されており、語形式の分類を示す「はんこ」も、分類間どうしの形態の相違と関連している場合が多く、語形式とその分布を一目で把握

²グロータース神父の日本語の地理言語学に関する論文については、グロータース(1976)を参照。

表 2: 初版 16 項目の解説ページ数と地図

語彙	総ページ*	全体図	ラトビア	リトアニア
1. 刺草	6	区画表示		はんこ表示
2. 蒲公英	5	はんこ表示	はんこ表示	
3. 矢車菊	4	はんこ表示	はんこ表示	はんこ表示
4. 鋸草	9	区画表示		
5. 大葉子	8	はんこ表示	はんこ表示	
6. 杜松	3	区画表示		
7. 松ぼっくり	9	区画表示		区画表示
8. 黒苺	3	はんこ表示	はんこ表示	
9. 玉葱	3	はんこ表示	はんこ表示	はんこ表示
10. 馬鈴薯	6	区画表示		はんこ表示
11. 蕪葉牡丹	2	区画表示		はんこ表示
12. 穀物	4	はんこ表示	はんこ表示	
13. 冬小麦	2	区画表示		
14. 榛の木	4	はんこ表示	はんこ表示	
15. 梨	3	はんこ表示	はんこ表示	はんこ表示
16. 木の上	2	区画表示		

表注：* 1 言語あたり

表 3: 第 2 版で追加の 10 項目の解説ページ数と地図

語彙	総ページ*	全体図	ラトビア	リトアニア
1. クローバー	5	はんこ表示	はんこ表示	
2. 向日葵	3	はんこ表示		
3. 蕎麦	2	はんこ表示	区画表示	
4. ニンニク	4	はんこ表示		
5. キュウリ	5	はんこ表示		
6. 野イチゴ	3	はんこ表示	はんこ+区画表示	
7. ビルベリー	5	はんこ表示	はんこ+区画表示	
8. ラズベリー	6	はんこ表示	はんこ+区画表示	
9. スモモ	5	はんこ表示		
10. 葉	2	はんこ表示		

表注：* 1 言語あたり

できるように描画されているとあってよい。

各項目にはバルト諸語全体の地図が付され、加えてラトビアもしくはリトアニアの言語地図（「矢車菊」については双方）が付されている。第2版で追加された10項目については、全体図と部分的にラトビアの言語地図が付されているが、リトアニアの言語地図は見当たらない。これは相互に、また全体地図の中においても地図の作成方法が異なっている。各地図には共通する地点番号が含まれ、地点番号は索引でどの地名を指示しているか調べられる。ラトビア512点、リトアニア国内704点、両国外13点の717点で、合計1229点あるが、注目できる点に、リーガ、ヴィリニウスなどいくつかの都市部については空白となっていて、調査が行われなかったことを示している。これは都市部の方言が地域変種ではなく社会言語学的に特別な性質を持っているからであると判断できる。リトアニアについては、空白の位置が2種類の地図で一致していることから、2枚の地図は同一の出典に基づいていると判断できる。

しかし、各項目の2種類の地図を対照して詳細に見ていくと、疑問を抱く記述方法があることに気がつく。たとえば、「刺草³」の場合、リトアニアの海岸部、ラトビアとの国境あたりの地点に注目すると、地点番号90, 91, 122にはデータが記録されていないが、それにもかかわらずバルト諸語全体の地図では、周辺の地点番号123, 151, 152などととも、同一の語形式を用いるというように区画されている。これは理解に苦しむ分析方法である。また、「タンポポ」の場合、全体地図ははんこ表示であるけれども、各地点についてははんこを押すのではなく、一定の地域をまとめ、そのうえではんこを押す形をとっている。このような措置は、対象地点が密であるため、見やすさという情報伝達上での価値があるが、若干省略しすぎである感も否めない。この項にはラトビアのはんこ表示の地図もあり、各地点における詳細な状況が分かる。この意味で、この項の場合、各地図がそれぞれ異なる役割を果たしているものと判断する。

以上に述べたように、本書の各項目の地図は、区画表示とはんこ表示の2通りの方法がある。本書のねらいからみて、全体地図こそが先行研究に存在しない、かつ主たる情報であるはずであるから、この点は統一した作成方法で行うほうがよかったと考える。

解説の記述方法については、次のような点が指摘できる。

おおまかに見ると、各項目の記述はおおよそ次のような順で配列されている。

- データの出典

³本書評では、言語地図の名称を植物の名称をかぎ括弧でくくって表す。各名称については、1節参照。

- 地図が対象とする具体的意味範疇⁴
- ラトビア語諸方言の形式の解説
- リトアニア語諸方言の形式の解説
- 例外的分布の解説
- 借用語

各種解説は、地図に示される共時的な言語現象の解説および各形式の歴史の変遷であり、なぜそのような分布になっているかという観点からの通時的な議論は特に認められない。語源に関する記述は先行研究の知見を引用して解説しているため、語形式をめぐってどのような議論があったかについて容易に知ることができる。さらに、死語となったバルト諸語の1つ古プロシア語についての解説も含まれる⁵。また、歴史文献における初出の形式と年代についても触れられており、語の歴史と変遷を知ることができる。これは歴史的に文字として記録が多少でもある言語ならではの詳細さである。加えて、「鋸草」や「松ぼっくり」などでは、民間語源についても言及し、語形式の説明に加えている。

語形式の歴史を中心に解説が成立しているとすれば、1項目にどれだけの語形式が区別されるかに比例して、記述の量（長さ）が変わってくる。たとえば、「鋸草」は23の語形式が区別されて解説が9ページである一方、「冬小麦」は2形態しかないため解説は2ページで済んでいる。このようなことから、各項目が等しくページ数を割り当てて記述するのではなく、必要に応じて量に変化が現れるようになっている。過不足のない解説を行うためには、記述量に制限を設けないというのも重要であると考えられる。

このように見ると、本書の記述は言語現象の地理的分布とそれぞれの来歴に限定され、地理言語学が求めるような分布の形成に関する記述は本書の目的外にあるように見える。この作業は読者に任されているのかもしれない。地理言語学における分布の理論・解釈モデルは、もっとも多用されるABA分布のほか、同音衝突やタブー語などいくつかあるが、これらを活用して、本書の言語地図を考察することは十分に可能である。序論において、バルト諸語の地理言語学の研究史がまとめられているものの、方言調査を地図化する作業を地理言語学と呼んでいるのだとすれば、柴田(1969)など日本の地理言語学の視点から見ると、地理言語学とは言いいがたい。

⁴特定の植物が対象となる場合には、学名（ラテン語）で指示がある。

⁵バルト諸語と言った場合、通常はラトビア語、リトアニア語、古プロシア語の3つを指す。Eckert et al. (1994), Kaukienė & Pakalniškienė (2011) など参照。

分布の背景、すなわち分析対象となる言語現象の歴史・発展を解明してこそ地理言語学である。この点を踏まえると、本書の解説は不十分であると言わざるを得ない。しかしながら、言語地図が提供されている以上、本書の資料的価値を認めて、読者が別の視点からの考察を加える、という可能性が残されている。

以上、言語地図の作成方法と解説の記述方法について、それぞれの特徴をまとめ、私見を述べた。最後に、本書は言語地図集であるが、地図と解説が相互参照しあうようにできていないのは、惜しいものである。地図と連携した解説は、当該項目の地理的分布に関する理解を促進することができるため、たとえば、地点番号を解説に盛り込むなどの工夫があれば、より理解が深まったであろう。

3 まとめ

本書は LKA (1977-1991) および LVDA (1999) を基礎に、植物相に関する 26 項目について、両者を合わせてバルト諸語全体にわたる語彙形式を地図化し、解説を加えたものである。本書は複数の著者からなる編著の形式を採用している。そのため、記述や地図の作成にばらつきが認められる。現状としては、このばらつきが本書の価値を下げるようには感じられない。しかし、いくつかの地点でデータが欠如しているにもかかわらず、方言区画（等語線）が引かれている点には疑問がある。区画を行うことが地理言語学の目的でないとしても、言語地図そのものを提示するからには区画を提示することに意義があるのかもしれない。本書は「言語地図集 (Atlas)」であって、地理言語学的研究の成果を示すものではないことにも注意できる。

本書は 3 言語による対訳であるが、特に初版の構成であれば、言語別に 3 分冊としても問題のないものである。第 2 版の設計では、ラトビア語・リトアニア語の部分がそれぞれ奇数・偶数ページに割り振られ、pdf として読むのは不便を覚えた。複数の言語による解説を 1 冊本として提供するの理念としては評価に値するが、実際に使う側にとっては重たくなって不便であるし、検索に時間もかかる。

本書はバルト諸語の言語地図集の第 1 巻であり、出版企画は始まったばかりである。今後が期待される。

付記

評者はそもそも初版を対象として書評を準備していたが、査読者のご厚意により、第 2 版の存在を知り、かつ人手することができた。ここに記して感謝の意を表する。

初版と第 2 版は、地図と構成および新たに付加された 10 種の項目部分を除いて、ほぼ同一である。本書評は初版について準備したものをもとに、第 2 版と内容をつ

きあわせつつ、対比させるべき部分是对比させ、改訂の意図するところなども含めて評した。

参考文献

- グロータース, W.A. (1976) 『日本の方言地理学のために』 東京: 平凡社
- 柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』 東京: 筑摩書房
- ALE=*Atlas linguarum Europae* (1975-2007)
- Auer, Peter & Jürgen Erich Schmidt (eds) (2009) *Language and Space: An International Handbook of Linguistic Variation, Vol. 1. Theories and Methods*. Berlin: De Gruyter.
- Eckert, Rainer, Elvira-Julia Bukevičiūtė und Friedhelm Hinze (1994) *Die baltischen Sprachen: Eine Einführung*. Leipzig: Langenscheidt Verlag Enzyklopädie.
- Jankowiak, Mirosław (2015) Recenzja: Baltu valodu atlants. Leksika 1: Flora, red. D. Mikulėnienė, A. Stafecka, Vilnius: Lietuvių Kalbos Institutas, Latvijas universitātes Latviešu valodas institūts, 2013, 568 ss. *Acta Baltico-Slavica* 39, 247-254.
- Kaukienė, Audronė ir Dalia Pakalniškienė (2011) *Prūsų kalba*. Klaipėda: Klaipėdos Universiteto Leidykla.
- Lameli, Alfred, Roland Kehrein & Stefan Rabanus (2010) *Language and Space: An International Handbook of Linguistic Variation, Vol. 2. Language Mapping*. Berlin: De Gruyter.
- LKA=*Lietuvių kalbos atlasas* 1-3. (1977-1991) Vilnius: Mokslas.
- LVDA=*Latviešu valodas dialektu atlants: Leksika*. Brigita Bušmane, Benita Laumane and Anna Stafecka (eds.) (1999) Rīga: Zinātne.
- Stafecka, Anna (2010) Atlas of the Baltic Languages: from Idea to Pilot Project. *Acta Baltico-Slavica* 34, 37-55.
- (2016) *Atlas of the Baltic Languages: Thematic Groups of Vocabulary. Dialectologia et Geolinguistica* 24, 5-20.

受領日 2018年8月6日
受理日 2018年12月18日